

「冷戦構造の変遷と経済学 冷戦期以降の戦争と経済思想」

経済学史学会大会報告用 20160522

橋本努

0.はじめに

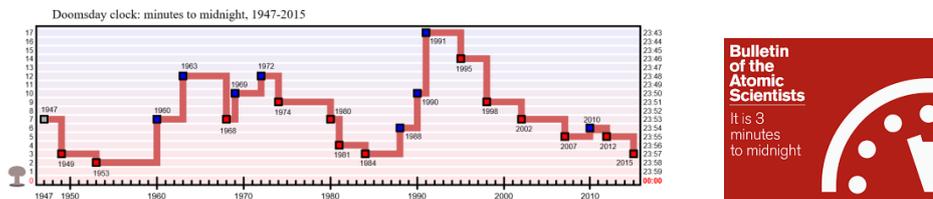
1-3.報告要旨

4.文献リスト

0. 【はじめに】

アメリカの科学誌「原子力科学者会報」(Bulletin of the Atomic Scientists)が定期的に公表している「世界終末時計」をご存じでしょうか。人類滅亡の危険性を直感的に表して警告を発したもので、1947年に同誌の表紙絵として誕生して以来、時計の時刻は表1のように推移してきた。1989年10月号からは核兵器の脅威だけでなく、気候変動による環境破壊や生命科学の負の側面による脅威なども考慮に入れているという。

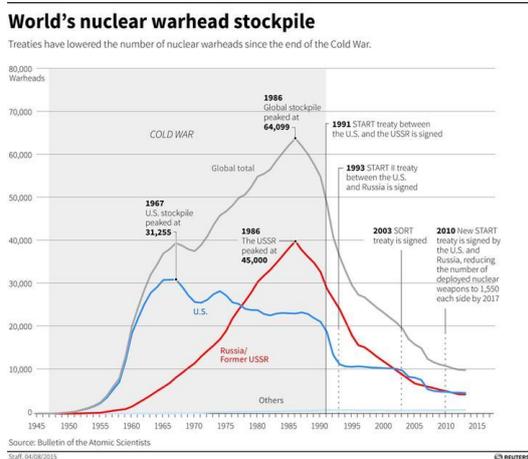
表1. 世界終末時計 1947-2015



1947年の時刻は世界滅亡7分前であった。その2年後の1949年にソ連が核実験に成功すると、時計の針は3分前に修正された。1953年にアメリカとソ連が水爆実験に成功すると、さらに緊張感が高まり2分前となった。ところが1960年にアメリカとソ連の国交が回復すると7分前に戻される。その後、さまざまな経緯を経て、2015年には再び3分前になっている(2016年も同様)。これは、気候変動のリスク、核軍備競争の再燃、あるいはテロリズムの危険などが急上昇したためであろう。2015年以降の私たちの世界は、1950年代に匹敵するほどの危機的状況に置かれている——これが原子力科学者会報の認識である。

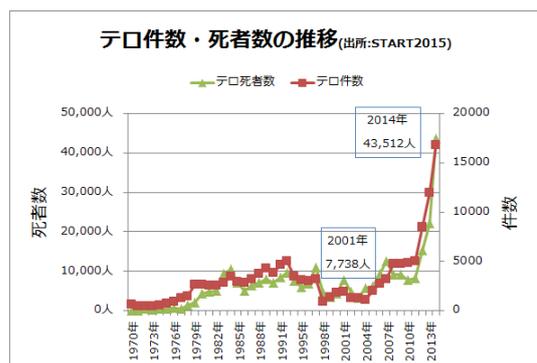
もちろん、1950年代と現在とでは、世界滅亡の認識は異なるだろう。表2「世界の核弾頭数の推移」をみると、米ソ間の核兵器開発競争は、1991年の冷戦後に急速に収縮していったことが分かる。核兵器に関しては、世界はこの25年間で、緊迫度を下げていったように見える(ただし核の拡散の危険は続いている)。これに対してテロリズムの脅威は、近年になってますます増大してきた。世界全体でテロによる死者数は、2014年に43,512人(表3を参照)。9.11世界同時多発テロ事件が起きた2001年は、テロによる死者数は7,738人であったから、2001年と2014年を比較すると、テロによる死者数は5倍以上に増加していることが分かる。世界はますますテロリズムの危険性を高めている。

表 2. 世界の核弾頭数の推移



<https://www.weforum.org/agenda/2015/08/which-countries-possess-nuclear-weapons/>

表 3. テロ件数・死亡者数の推移



<http://blog.livedoor.jp/kazmas/archives/52203425.html>

(メリーランド大学の研究プロジェクト START(the Study of Terrorism and Responses to Terrorism)を元にグラフ化したもの。1970-2014。)

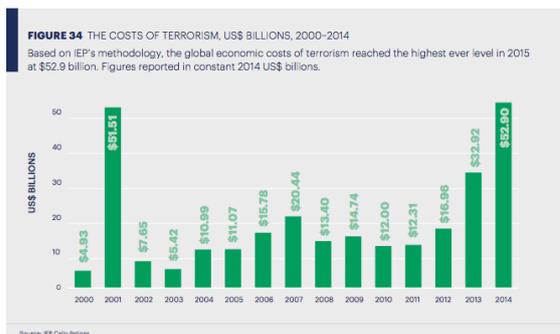
テロに対処するためのコストも増大している。表 4 は、2000 年から 2014 年にかけてのテロリズムのコストの推移（世界全体）である。2014 年には、529 億ドル（1 ドル=100 円で 5 兆 2900 億円）となっている。

ちなみに、米国における第二次世界大戦のコストを 2011 年の通貨価値で換算すると、4.1 兆ドルになるという。米ブラウン大学の「戦争コスト」プロジェクトによれば、今後数十年間にわたってアメリカが支払うことになるであろう戦争のコスト（それは主としてテロとの戦争になるだろう）は、4.4 兆ドル（この数字には、元軍人に対して支払う医療費や傷害補償が含まれる）。テロリズムとの戦争は、コストの面からみれば、第三次世界大戦の様相を呈してきたようだ。

現在、テロリズムとの戦争は、主として IS と他の諸国とのあいだの戦いである。IS は、一日平均 3 万 4000~4 万バレルの原油を生産し、150 万ドル（一億七千万円）の収益をも

たらしているという（資産は 20 億ドル）。IS との戦いは、どのように遂行されるべきなのか。またテロとの戦争を含めて、「平和と経済の関係」をどのように構築していくべきなのか。このような根本問題に応じるための独自の平和思想を理論的視角としつつ、以下では冷戦期以降の戦争経済思想を素描してみたい。

表 4. テロリズムのコスト 2000-2014



<https://news.vice.com/article/deaths-and-damages-due-to-terrorism-have-never-been-higher>

■ 報告要旨

1. 【問題の背景】

クラウゼヴィッツの『戦争論』によれば、戦争とは「異なる手段をもってする政治の延長」である。だが戦争は、「異なる手段をもってする経済の延長」でもあるだろう。第二次世界大戦後の米国では、戦争は総じて（アフガニスタンおよびイラクとの戦争を除いて）経済の成長に貢献してきた。戦争をせずとも、その莫大な防衛費は「軍事ケインズ主義」として雇用創出に貢献し、市場経済における安定した秩序基盤を提供してきた。戦争は、これを遂行してもしなくても経済に貢献するのだとすれば、戦争を純経済理論的に批判することは難しい。かかる状況下で戦争を批判しえた主流経済学者たちが、主として民主社会主義的な信条をもっていたことは検討に値するだろう。とりわけ軍事ケインズ主義を批判したジョン・ロビンソン、1988年に米国経済学会（AEA）の年次総会で「E C A A R（軍縮を考えるエコノミストの会 Economists Allied for Arms Reduction）」を設立した中心メンバーのローレンス・クライン、ケネス・アロー、ワシリー・レオンチェフなどはいずれも社会主義観念に大きな影響を受けている。社会主義の思想は、冷戦下の西側では平和の価値を担保したのである。むしろ、冷戦期を含めた帝国主義段階の資本主義を社会主義体制によって抜本的に解決しようとみなすレーニン＝スターリンの教義は、虚妄にすぎない。冷戦下の現実、資本主義陣営と社会主義陣営の軍拡競争であり、その破局的対決をいかに阻止するかが問われていた。冷戦後は民族主義紛争が問題となり、9.11後はとりわけテロリズムが問題となるが、戦争をめぐる根本問題は変化していない。私たちは広島・長崎への原爆投下以降、核戦争による世界の破局可能性を抱えている。かかる危機を阻止し世界平和をいかにして築くかという問いこそ、戦争と経済をめぐる根本問題とい

える。経済学史を回顧すると、古典派のスミスやヒュームにおいては商業の発達とともに戦争がなくなるとは展望されず、その意味で根本的な平和は問題になっていなかった。これに対して戦後の経済学者たちは積極的な平和構築という課題の一端を負う。この問いに重要な貢献をなした経済思想家として、とりわけE・シューマッハー(1911-1977)、J・ガルブレイス(1908-2006)、K・ボールディング(1910-1993)の三人を挙げることができる(もう一人を加えるならJ・ガルトゥング(1930-))。

ガルブレイスは1945年夏、アメリカの対独爆撃調査団の団長としてドイツを訪れる。その調査団にはドイツ生まれでイギリス国籍を得たシューマッハーも加わっていた。二人はドイツの惨状を目の当たりにし、その後、本格的な平和論・平和外交を展開するようになる。これに対してイギリスで生まれ渡米したボールディングは、戦時中の1941-42年にかけて国際連盟(プリンストン)の経済および財政政策の経済学者であったが、平和主義を理由に辞職。42年にA Peace Study Outline: The Practice of the Love of God、45年に『平和の経済学』を著した。三者は多感な時期に戦争を経験し、戦争問題を自らの研究テーマの一つとした。シューマッハーはその後、英石炭公社(1950-1971)に勤めるかたわら独自の研究をつづけ、主著『スモール・イズ・ビューティフル』(1973)において平和を築くための独創的な経済秩序論を提起、『宴のあとの経済学』(1979)でも展開した。ガンジーに影響を受けたその平和経済思想は、その後「シューマッハー協会」に継承された。積極的平和を築くための諸提案は、「シューマッハー双書(briefings)」から様々に刊行されている(現在16冊、いくつか邦訳あり)。彼は平和のための思想の種をまいたといえる。

ガルブレイスの場合、彼は『新しい産業国家』(1967)でテクノクラート支配による戦争の制御不可能性を批判した。パンフレット『ベトナムから手を引く方法』(1967)は初版にして25万部を売り、ベトナム戦争終結に向けて大きな貢献をなした。さらに『軍産体制論——いかにして軍部を抑えるか』(1969)や『経済学・平和・人物論』(1972)を著し、その後も多くの著作で戦争と平和の問題を論じている。彼の平和論は、冷戦構造下の周辺地統治において、新しいリベラルの立場から保守政治を批判する思想的意義をもつ。ガルブレイスはまた、アメリカの歴代大統領の意思決定に影響を与えたことでも知られる。R・パーカーによる伝記『ガルブレイス——闘う経済学者(上・中・下)』(2004)は、その内容の約半分近くが戦争をめぐる米国・インドの意思決定とガルブレイスの関係を扱う。

ボールディングの『紛争の一般理論』(1962)は、おそらく冷戦期の最重要書であろう。戦争の行為理論を総合し、自身の知見を加えた。『愛と恐怖の経済——贈与の経済学序説』(1973)では、戦争と福祉の関係を贈与の観点から理論化し、『紛争と平和の諸段階』(1978)では、絶対的平和主義の観点から平和構築のための段階論を提起、思想的に深いビジョンに到達した。「平和学の父」と呼ばれる所以である。彼は平和への関心から、経済学を超えてエコシステムを築く学問へと導かれ、多くの著作を残した(例えば『地球社会はどこへ行く(上・下)』1978)。全六巻からなる『論文集(Collected Papers, 1971-1985)』の第五・六巻には戦争と平和をめぐる諸論稿が収録。編著にPeace and the War Industry (1970)、共編著にDisarmament and the Economy (1963)、Economic Imperialism: A Book of Readings (1972)があり、同時代の戦争論に関する知見をまとめてもいる。

三者の平和構想は、それぞれ「地域単位(シューマッハー)」、「国家単位(ガルブレイス)」、「超国家単位(ボールディング)」の議論といえる。共通の関心としてあるのは、人間の潜

在能力为国家のためにつぎ込むような「総力戦体制」の相対化であり、「地域の発展と人間の善き生」「国家へのリベラルな制約（リベラルな国家の建設）」「世界政府設立のための運動と構想力」という三つの次元に人類の叡智を移行させる試みである。（対比されるのは、大規模テクノロジー、福祉国家建設のための総力戦、イデオロギー対立（ナショナリズムを含む）である。）また三人は、資本主義と社会主義の思想対立に基づく冷戦期の核開発競争に反対する第三の道体制を探ったが、いわゆる社会民主的な政策だけでは戦争の抑止として不十分であると認識していた点でも共通する。では三者が提起した諸構想はどのようなもので、その意義はどこにあるのか。

2. 【根本問題の定式化】

三者三様の経済思想的意義を整理・検討するに際して、次のような問題関心（根本問題の提起）から接近したい。まず戦争と平和の関係は、暴力と紛争の二つの観点から理解することができる（次表参照）。ここで「暴力」とは人の生死を操る力であり、死の恐怖に訴えて人々を服従させるように仕向ける強制力である。この暴力は、社会を形成する際に必要な作用になりうるという点では有益な側面をもつ。しかし暴力は、人々を抑圧し服従を強いる力でもある。非暴力とは、暴力から解放された自由の状態である。これに対して「紛争」とは、協調・共振とは反対の人間関係であり、一方が他方に対して不利益を生む場合もあるが、その作用は社会的に有意義な仕方で行われる場合もある。例えば市場経済やスポーツにおける競争は、参加者のあいだの紛争形態の一つである。しかしこれらは一定のルールのもとでの紛争であり、切磋琢磨の関係を築くことで、当事者にも社会全体にも利益をもたらすと考えられる。競争は、これをすぐれたルールのもとで運営すれば、敗者にとって不利益であるとしても、その不利益を超える全体利益が生じることもある。ここでさらに、紛争を生産的／消耗的の観点から区別し、暴力を構造的／物理的の観点から区別すると、戦争とは「物理的暴力＋消耗的紛争」であり、これに対して平和とは「非暴力＋非紛争」として定義することができる（詳しい説明は省略）。

| | 非暴力 non-violence | 構造的暴力 structural violence | 物理的暴力 physical violence |
|---------------------------------|-----------------------------------|--|----------------------------|
| 非紛争 non-conflict | 平和 | 覇権／主権による安定 (軍事ケインズ主義、集团的 安全保障、等) | 暴力の独占による安定 (正統的支配) |
| 生産的紛争 positive conflict | 競争的秩序(市場、ス ポーツ、学歴、コンテ スト、等) | 経済的帝国主義 | 開発としての帝国主義・ 植民地支配 |
| 消耗的紛争 exhaustive conflict | 賭博依存等 | 略奪型・衰退型資本主義 | 戦争 |

ここで平和とは、原義にしたがい、第一義的には休止状態かある種の精神的境地を意味

する。いずれも世俗社会を動態化させるための原理ではなく、その意味で「タナトス（死の原理）」である。平和は、その第三の要素としての「エロス＝ビオス（多様性と繁栄の原理）」をもたなければ文明社会を維持することができない。戦争を抑止する平和な文明社会とは、「暴力（覇権／主権、すなわち正当な支配権力）」、「紛争（競争的秩序）」、「エロス（多様性と繁栄）」の三つの要素によって支えられるものでなければならない。戦争の対立概念は、たんなる平和ではなく、戦争の要素たる「暴力」と「紛争」を含みもつものでなければならない。しかし戦争を抑止するための対抗力は、これら三つの要素から等しく生まれるわけではない。そこで根本問題とは次のようになる。すなわち「平和は第一義的にはタナトスであるが、生を否定するその状態から、いかにして私たちはエロス＝ビオス（多様性と繁栄の原理）を受けとり、戦争のない社会を築くための動因と知恵を導き出すことができるのか」と。「いかにして戦争を競争秩序に転換できるか」や「いかにして戦争を覇権的安定に転換できるか」は二次的問題である。また戦争に照準すると、核戦争（究極的には第三次世界大戦）、冷戦下の周辺地戦争、民族紛争、低強度紛争、テロリズムなど、時代の変遷に応じて、対応策の問いを区別することができるが、本報告では平和に照準し、一つの根本問題を立てる。）

3. 【問題に対する三者の応答】

平和の二要素たる非暴力と非紛争のうち、「非暴力としての平和（ガンジー）」はシューマッハーによって継承された（『スモール・イズ・ビューティフル』）。シューマッハーは、ケインズの逆説的な反道徳主義に反対して自身の立場を明確にしている。ケインズによれば、食欲と拝金主義を肯定すれば経済的繁栄を行き渡らせることができ、それによって平和を達成することができる。しかしシューマッハーによれば、平和と非暴力は永続性のある対自然関係から生まれるのであり、そのためには、科学・技術の方法と道具が、①安くほとんどだれでも手に入れられ、②小さな規模で応用でき、③人間の創造力を発揮させるようなものでなければならないという。経済的進歩を称賛するのではなく、「自然保護者、エコロジスト、野生動植物の保護論者、有機農業の推進者、流通制度の改革者、村落の小工業主等々として非暴力の運動に従っている人たちに、ささやかな援助と支持を与えるべきとした。シューマッハーは、他方で雇用よりも余暇を重視するガルブレイスを批判する。人間とは本来、創造的な仕事に従事することによって非暴力の精神的基盤を得る存在であり、とりわけ農業は生命との良好な関係を築く。これに対して大都市への人口流入は恒常的に失業者を生み出す。問題は、農村と小都市に、何百万の仕事場をどのように作り出すかであるとみなされた。平和をもたらすエロスは、農業と創造的小事業に求められた。産業社会における精神の諸病理を、シューマッハーは人間の本来の魂のあり方という観点から捉え、代替的理念を「潜在能力の発展としての自由」に求めた（最終的にはキリスト教に導かれた）。

ガルブレイスの場合、「非紛争としての平和」を、いかなる物理的暴力によって実現するかが課題とされた。冷戦期の思想対立に基づく二極覇権構造は、核戦争のリスクを抱えるとともに、覇権空間の競り合いから周辺地域での戦争を生み出した。社会民主主義的な思考から、ガルブレイスは資本主義と社会主義の思想対立を根本的とはみなさず、したがっ

てパクス・アメリカナ体制を国益とみなさない視点から、ベトナム戦争を批判することができた。覇権対立ではなく多国間協調体制（またそのためのリベラルな国際関係論）、テクノクラート支配の暴走を防ぐ対抗権力＝市民社会の視角、戦争を扇動する保守派論客への批判と冷徹でリベラルな国益判断、などの議論を提供した。エッセイ「ノースダコタ計画」（1978年、『ある自由主義者の肖像』所収）は、ガルブレイスの平和思想を如実に示している。①大国分割による覇権支配の回避、②イデオロギー衝突を平和的無関心に転化、③国境の恣意化による紛争回避、④核兵器に対抗する防衛ミサイルをすべての国に配備、⑤政治的野心者の国外追放、⑥人種混合による民族主義の回避、を提案。リベラルな立場から平和の可能性を示した。ではガルブレイスの場合、いかなるエロスが平和を積極的に構築する動因として位置づけられるのか。一見すると皆無であり、市民的自律の理念が戦争を回避する基点となっている。だが後期のガルブレイスは「リベラル対保守」の構図を支配層対被支配層の対立軸によって代替・相対化し、貧困層への「思いやり(compassion)」の観点から新保守主義へと接近する（『満足の文化』1992,『おもいやりの経済』1999）。社会主義に共感しつつも、貧困層の欲望を刺激して繁栄を導くというエロスの動員に、彼の平和思想を読み解くカギがある。

最後にボールディングは、非暴力と非紛争の両方の観点から平和を捉えた。彼はキリスト教における神への愛から戦争不参加を訴えた。政治的には、一方では軍事同盟から世界政府軍の設立を展望しつつ「非紛争」の諸政策を構想し（『紛争と平和の諸段階』）、他方では「非暴力」を「愛としての贈与」の観点から理解し、福祉政策の内実を問題にした（『愛と恐怖の経済学』）。彼は平和政策を「社会的な農業」として理解し、具体的には①諸国による恒久平和の公式表明、②段階的な緊張緩和、③国家と軍隊の分離、④「敵のいない兵士」理念による軍隊教育、⑤暴力に対する非暴力的対応の研究、⑥平和のためのNGOを診断する政府報告の作成、⑦政府内に平和省を設立して、教育機関、新聞、ラジオ、テレビ、出版などを通して大衆と政府を教育することや、あるいは、「国連イメージ伝達組織 Organization for Image Transmission」を設立し、各国が恒久平和宣言をすることでイメージ・アップを伝達、世界平和への協調を調達するというイメージ先行型の包摂などを提案した。思想的には、彼の平和論は地球全体をキリスト教の普遍愛の視点で理解し、それをエコロジーと贈与の世界的実践に結びつけるアガペーの使命を示している。背後には、戦争の原因は極めて複雑で特定できないという理解があり、戦争の因果関連の探求よりも精神的・制度的な和解イメージ政策を求める姿勢がある。

以上の議論を整理すると次のようになる。

シューマッハー

| | |
|------------------------------|--------------------------|
| 非紛争 non-conflict | 本来的で創造的な仕事、潜在能力の自由、エコロジー |
| 生産的紛争 positive conflict | 農業、小規模工業、仕事場、地域連帯経済 |
| 消耗的紛争 exhaustive conflict | 大規模工業批判、大都市生活批判、経済人批判 |

ガルブレイス

| | | |
|----------------------------|---|----------------------------|
| 非暴力 non-violence | 構造的暴力 structural violence | 物理的暴力 physical violence |
| 国内外の貧困層の 繁栄、思いやりの 政治 | 反テクノストラクチャー、 軍事ケインズ主義批 判、多国間協調、人種 混合 | 世界領土等分割に よる国家形成 |

ボールディング

| | 非暴力 non-violence | 構造的暴力 structural violence | 物理的暴力 physical violence |
|------------------------------|--------------------------|------------------------------|----------------------------|
| 非紛争 non-conflict | 普遍愛としてのアガペー、イメージ先行型包摂の運動 | 国家と軍隊の分離、宇宙船地球号の世界倫理 | 集団的安全保障から世界政府軍の形成へ |
| 生産的紛争 positive conflict | マイクロ・マクロ経済学の総合化 | 経済的帝国主義批判 | |
| 消耗的紛争 exhaustive conflict | 贈与としての愛(配慮道徳に基づく福祉国家形成) | | |

思想としては、シューマッハーは「地域コミュニタリアニズム+成長論的自由主義」、ガルブレイスは「福祉国家型リベラリズム+新保守主義」、ボールディングは「コスモポリタニズムに拡張されたコミュニタリアニズム」と解釈できる。それぞれ「非暴力+非紛争としての平和」の文明化原理に一定の応答を与えている。なかでもボールディングは、平和構築のための「愛のビオス」を据える。戦争が「経済的に儲からないとは言えない」場合に、戦争を回避するための経済学的啓蒙とは何かと言えば、それは戦争が経済的に儲からない社会を構築する方法を示すことであり、しかもその功利的計算を世界に啓蒙することである。ボールディングによれば、人間のイメージの価値構造には二層あり、中核部分はパーソナリティに根差した定常的なものでも、外殻部分は大々的な再編成を生じやすい。紛争中の当事者たちを調停するには、それぞれの外殻部分のイメージを、協調主義的な性格をもった媒介者によって再編する必要がある(『紛争の一般理論』)。媒介者は、和解を調達する愛の源泉から、ある「サリエンシー(saliency:突出して目立つ性質)」を見つけ出して相互のイメージを変化させる力を発揮する。愛はかかる媒介者の営みを通じて、諸国を集団的安全保障の連帯枠組みへ、さらには世界政府軍の設立へと地平融合させる動因となる。ボールディングは、T・シェリングのゲーム理論を援用しつつ、かかる思想的主張を体系化した点に、独自の貢献がある。

4. 【文献リスト】

□背景

Clausewitz, Carl von [1832-34→1935=1965] Vom Kriege: hinterlassenes Werk: als Volksausgabe herausgegeben von A.W. Bode, Leipzig: H. Schaufuß. クラウゼヴィッツ『戦争論』淡徳三郎訳、徳間書店

U.N. Department of Economic and Social Affairs [1962] Economic and Social Consequences of Disarmament, New York: United Nations. (ランゲ、レオンチェフ等が寄稿)

Robinson, J. [1972] “The Second Crisis of Economic Theory,” American Economic Review, Vol. 62, No.1/2, pp.1–10.

服部彰編[1994]『戦終結後の軍縮問題と世界経済の再建: E C A A R シンポジウム議事録』多賀出版 (ローレンス・クラインの講演と論文を所収)

Arrow Kenneth [1994] “International Peace-keeping Forces: Economics and Politics,” in Manas Chatterji, Henk Jager, and Annemarie Rima eds. The Economics of International Security: Essays in Honour of Jan Tinbergen, London: St. Martin's Press.

Leontief, Wassily and Faye Duchin [1983=1987] Military Spending: Facts and Figures, Worldwide Implications, and Future Outlook, New York: Oxford University Press. W. レオンティエフ、F.デュチン『軍事支出 世界的経済発展への桎梏』清水雅彦訳、東洋経済新報社

橋本努[2007]『帝国の条件 自由を育む秩序の原理』弘文堂

ガルトゥング、ヨハン[1991]『構造的暴力と平和』高柳先男／塩屋保／酒井由美子訳、中央大学出版部

Galtung, Johan, Peace Economics: From a Killing to a Living Economy, Transcend University Press. (<http://www.kolofon.com/index.aspx?docid=96&pid=2784>)→まだ日本の大学図書館に入っていない。

□シュマッハー関係

Schumacher, Ernst Friedrich [1962] Roots of Economic Growth, Gandhian Institute of Studies.

Schumacher, Ernst Friedrich [1973=1986] Small is Beautiful: Economics as if People Mattered, Harper & Row. E.F.シュマッハー『スモール・イズ・ビューティフル 人間中心の経済学』小島慶三／酒井懋訳、講談社学術文庫

Schumacher, Ernst Friedrich [1979=2011] Good Work, Harper & Row. E.F.シュマッハー『宴のあとの経済学』伊藤拓一訳、筑摩書房 (ちくま学芸文庫)

Schumacher, Ernst Friedrich [1981] The Schumacher Lectures, edited with an introduction by Satish Kumar, Harper & Row.

Schumacher, Ernst Friedrich [1977=1980] A guide for the Perplexed, Harper & Row. E.F.シュマッハー『混迷の時代を超えて: 人間復興の哲学』小島慶三／斎藤志郎訳、佑学社

Schumacher, Ernst Friedrich [1997=2000] *This I believe and other essays*, Green Books. E.F.シュマッハー『スモール・イズ・ビューティフル再論』酒井懋訳、講談社学術文庫

Wood, Barbara [1985=1989] *Alias Papa: a Life of Fritz Schumacher*, Oxford University Press. バーバラ・ウッド『わが父シュマッハー：その思想と生涯』酒井懋訳、御茶の水書房

McRobie, George [1981] *Small is Possible; with a foreword by Verena Schumacher*, J. Cape.

Hannum, Hildegard ed. [1997] *People, Land, and Community: collected E.F. Schumacher Society Lectures: with an Introduction and Comments by Nancy Jack Todd*, Yale University Press.

Robertson, James [1998=1999] *Transforming Economic Life: a Millennial Challenge*, (Schumacher briefing, no. 1) Green Books for the Schumacher Society; in association with the New Economics Foundation. ジェイムズ・ロバートソン『21世紀の経済システム展望：市民所得・地域貨幣・資源・金融システムの総合構想』石見尚／森田邦彦訳（シュマッハー双書）、日本経済評論社

Robertson, James [1985=1988] *Future Work: Jobs, Self-employment and Leisure after the Industrial Age*, Gower. ジェイムズ・ロバートソン『未来の仕事』小池和子訳、勁草書房

Dawson, Jonathan [2006=2010] *Ecovillages: New Frontiers for Sustainability*, foreword by Caroline Lucas, (Schumacher briefing, no. 12) Green Books. ジョナサン・ドーソン『世界のエコビレッジ：持続可能性の新しいフロンティア』緒方俊雄，松谷泰樹，古橋道代訳、(シュマッハー双書) 日本経済評論社

Douthwaite, Richard [1999=2001] *The Ecology of Money*, (Schumacher briefings, no. 4) Green Books. リチャード・ダウスウェイト『貨幣の生態学：単一通貨制度の幻想を超えて』馬頭忠治／塚田幸三訳、北斗出版

Schumacher, Diana [2011] *Small is Beautiful in the 21st Century: the Legacy of E.F. Schumacher*, (Schumacher briefing, no. 17) Green Books for The Schumacher Society

Girardet, Herbert [1999=2003] *Creating Sustainable Cities*, (Schumacher briefing, no. 2) Green Books for the Schumacher Society. Herbert Girardet 著『ぐるぐるめぐりの創造的まち育て』塚田幸三訳、Born Center (ボーン・センター) ブックレット・シリーズ, No 4、千葉まちづくりサポートセンター

Seymour, John and Herbert Girardet [1989=1990] *Blueprint for a Green Planet: How You Can Take Practical Action Today to Fight Pollution*, illustrated by Ian Penney, Dorling Kindersley. ジョン・シーモア／ハーバート・ジラード『地球にやさしい生活術：緑の惑星を守るために、あなたが今日からできること』飯田岳美ほか訳、TBS ブリタニカ
【シュマッハー双書 HP】 <https://www.greenbooks.co.uk/schumacher-briefings>

□ガルブレイス関係

Galbraith, John Kenneth [1967a=1972] *The New Industrial State*, Boston: Houghton

- Mifflin. ガルブレイス 『新しい産業国家』 都留重人監訳、石川通達ほか訳、河出書房新社
- Galbraith, John Kenneth [1967b] *How to Get out of Vietnam*, Signet.
- Galbraith, John Kenneth [1969=1970] *How to Control the Military*, New American Library. ガルブレイス 『軍産体制論 いかにして軍部を抑えるか』 小原敬士訳、小川出版
- Galbraith, John Kenneth [1971=1972] *A Contemporary Guide to Economics, Peace, and Laughter*, essays edited by Andrea D. Williams, Boston: Houghton Mifflin. ガルブレイス 『経済学・平和・人物論』 河出書房新社、小原敬士／新川健三郎訳、第一章「外交政策——悪しき十年間の率直な教訓」
- Galbraith, John Kenneth [1992=1993] *The Culture of Contentment*, Houghton Mifflin Co. 『満足の文化』 中村達也訳、新潮社
- Galbraith, John Kenneth [1994] “The Autonomous Military Power: An Economic View,” in Chatterji, M., Jager, H. and Rima, A. eds., *The Economics of International Security*, New York: St. Martin’s Press.
- Galbraith, John Kenneth [1999] 『おもいやりの経済』 福島範昌訳 (未来ブックシリーズ) たちばな出版
- Richard Parker [2005=2005] *John Kenneth Galbraith: his life, his politics, his economics*, University of Chicago Press. リチャード・パーカー 『ガルブレイス : 闘う経済学者 (上・中・下)』 井上廣美訳、日経 BP 社
- Galbraith, John Kenneth [1979=1980] *Annals of an Abiding Liberal*, edited by Andrea D. Williams, Boston : Houghton Mifflin. ガルブレイス 『ある自由主義者の肖像』 ガルブレイス著作集第八巻、都留重人監訳、鈴木哲太郎ほか訳、TBS ブリタニカ
- Galbraith, John Kenneth [1981=1983] *A Life in Our Times: Memoirs*, New York: Ballantine Books. ガルブレイス 『回想録』 松田銑訳、ガルブレイス著作集第九巻、都留重人監修、TBS ブリタニカ
- Reisman, David A. [1980] *Galbraith and Market Capitalism*, New York: New York University Press.
- Stanfield, Ron J., and Jacqueline Bloom Stanfield [2004] *Interviews with John Kenneth Galbraith*, Jackson: University Press of Mississippi.
- Waligorski, Conrad [2006] *John Kenneth Galbraith: The Economist as Political Theorist*, Lanham, Md: Rowman & Littlefield.

□ ボールディング関係

- Boulding, Kenneth E. [1942] *A Peace Study Outline: The Practice of the Love of God*, Philadelphia Yearly Meeting Book Committee
- Boulding, Kenneth E. [1945=1949] *The Economics of Peace*, Prentice Hall. ボウルディング 『平和の経済学』 永田清訳、好学社
- Boulding, Kenneth E. [1962=1971] *Conflict and Defence: A General Theory*, Harper & Bros. ボールディング 『紛争の一般理論』 内田忠夫, 衛藤瀋吉訳、ダイヤモンド社
- Boulding, Kenneth E. [1964=1967] *The Meaning of the Twentieth Century: the Great Transition*, Harper & Row. ボールディング 『二十世紀の意味 : 偉大なる転換』 清水幾太

郎訳、岩波書店

Boulding, Kenneth E. [1973=1974] *The Economy of Love and Fear: A Preface to Grants Economics*, Wadsworth. ボールディング『愛と恐怖の経済：贈与の経済学序説』公文俊平訳、佑学社

Boulding, Kenneth E. [1975] *International Systems: Peace, Conflict Resolution, and Politics*, Colorado Associated University Press.

Boulding, Kenneth E. [1975] *Sonnets from the Interior Life, and Other Autobiographical Verse*, Colorado Associated University Press.

Boulding Kenneth E. [1978a=1980] *Ecodynamics: a New Theory of Societal Evolution*, California: Sage Publications. ボールディング『地球社会はどこへ行く』上・下、長尾史郎訳、講談社

Boulding, Kenneth E. [1978b=1980] *Stable Peace*, University of Texas Press. ボールディング『紛争と平和の諸段階』武者小路公秀訳、ダイヤモンド社

Boulding, Kenneth E. [1985] *Toward the Twenty-First Century: Political Economy, Social Systems, and World Peace*, Colorado Associated University Press.

Boulding, Kenneth E. [1985=1988] *The World as a Total System*, Sage. ボールディング『トータル・システム：ニューアカデミーの確立』高村忠成ほか訳、第三文明社

Boulding, Kenneth E. [1986] *Mending the World: Quaker Insights on the Social Order*, Pendle Hill Publications.

Boulding, Kenneth E. [1989=1994] *Three Faces of Power*, Sage. ボールディング『21世紀権力の三つの顔』益戸欽也訳、産能大学出版部

Boulding, Kenneth E. [1992] *Towards a New Economics: Critical Essays on Ecology, Distribution, and Other Themes*, Edward Elgar.

Boulding, Kenneth E. [1993] *The Structure of a Modern Economy: the United States, 1929-89*, Macmillan.

Boulding, Kenneth E. ed. [1970] *Peace and the War Industry*, Transaction Books, Aldine Pub. Co.

Boulding, Kenneth E. and Tapan Mukerjee eds. [1972] *Economic Imperialism: A Book of Readings*, Ann Arbor: The University of Michigan Press.

Boulding, Kenneth E. and others [1969] *National Priorities: Military, Economic, and Social*, Washington: Public Affairs Press.

Scott, Robert [2014] *Kenneth Boulding: A Voice Crying in the Wilderness* (Great Thinkers in Economics Series), Palgrave Macmillan.

Dolfsma, Wilfred and Stefan Kesting eds. [2015] *Interdisciplinary Economics: Kenneth E. Bouldings Engagement in the Sciences* (Reprint), Routledge Studies in the History of Economics.